

講演記録

ガストン・ピノーを語る：人と仕事

前 平 泰 志

Gaston Pineau: What He is and his Works

Yasushi MAEHIRA

こんにちは。京都大学の前平です。本日はガストン・ピノー先生をお招きして、「ライフヒストリーと生涯学習」というテーマでお話をさせていただく予定です。その前に、ガストン・ピノーという人がどういう人であるかということは、ほとんど日本では知られていませんので、彼について少し紹介をして前座の代わりを務めさせていただきたいと思っています。

彼は、フランス語圏では、よく知られた生涯学習の理論家なんですけれども、どういう履歴でどういう人かということをごみなさんにお知らせするのは、京都ではこれが初めて、おそらく日本でも初めてではないかと思いますので、すこし詳しく紹介してみたいと思います。

1) 生涯教育の革新

実は、私はガストン・ピノーという人を、かなり古くから存じ上げており、個人的な親交があります。30年くらい前に私はユネスコ教育研究所というドイツにある、まだ東ドイツと西ドイツに分かれていたときのことで、そのころの西ドイツの研究所でお世話になったことがあります。そこでの研究所の主な仕事は、ユネスコの活動のひとつとして、1年に何回かは国際的な著名な先生と共同研究を立ち上げ、その研究結果をセミナーを開いたあとで、本にして公刊することでした。それから、もうひとつの仕事は『International Review of Education』という今でも国際的に権威のある教育のジャーナルですけれども、そのジャーナルを編集をすることでした。あまり世界では生涯学習とか生涯教育とかいう言葉が知られていないときに、そのころに研究所の方針としてこれからは生涯教育というものをテーマにして研究を続けようということが理事会で決まりまして、その国際的な研究会の中でこのガストン・ピノーという人と出会ったのです。初めは全く私は生涯教育がどのようなものかわかりませんでした。まだ若いころでしたし、日本では生涯教育というと障害者の教育だと思われていた時代でした。その当時は60年代から70年代の初めなんですけれども、「ワナだ」という言い方をする社会教育の関係者もいまして、社会教育をつぶすために生涯教育という言葉を出してきた、あるいは産業界の要請に応えるために生涯教育というのを持ち出してきたということで、とても警戒されていました。公民館や社会教育の関係者の方たちは生涯教育という言葉に対してアレルギーを持っていました。最近ではもちろん、そういうことはないんですけど、そういう時代だったんですね。ところが、ガストン・ピノーのその当時の論文を読むと、生涯教育をめぐって右か左という問題の発想から無縁の地平からですね、全く新しいラジカルな学問研究の分野を創り出していくような論考を次々発表していました。私はそこで目からうろこが落ち

るような感じがしまして、ずっと注目し続けていましたし、本当に尊敬しています。私より10歳年上ですけれども、まだお元気で、日本にやって来られるのは初めてなのですが、そういう人に話をしていただけなのは私としては、とても身に余る光栄なことだと思っています。

今日は時間が余りありませんけれども、ガストン・ピノーの人となりをみなさんに簡単に紹介させていただきたいと思います。ガストン・ピノーの書いているものは最近、ますますむずかしくなっていて、とても哲学的なところを走っているんですが、もともと社会学者であり、その面からシャープな切れ味のするそういう論考をずっと発表していた人です。彼の最近の論文、例えばeco-formationのように、どちらかというとエコロジーに関心を持って、そちらのほうに研究関心が動いているようですけれども、それについては知らないのですが、初期のころ、中期、そしてライフヒストリーを研究の焦点にすえる頃くらいまでは、かなり私は追っかけていました。私は、ピノー氏について論文を書いたことはないのですが、どうしているかということはいわかっていないつもりなんです。

お手元の資料をご覧いただければ、おわかりのように「ガストン・ピノーを語る」という要約の中に七つくらいの項目に分けて説明してあります。これはガストン・ピノー自身が定義したものをある程度訳して、自分のライフヒストリーと自分が考えられてきたことを重ね合わせて書かれていますので、これに沿って、お話しますとだいたいわかっているのではないかと考えています。

ガストン・ピノーという人は、1939年にフランスの、おそらく農業労働者の子どもだと思っていますけど、西部地方で生まれています。この経験が人生の創造というライフヒストリーを創る前体験になっています。それから、人生のどの段階に、どのような年齢であろうとも教育は出来るのだ、というような信念を自分の生まれた地域で育んだのだと思います。一番最初の彼の著作は、'Education ou alienation permanente ? Repères mythiques et politiques' という編著が公刊されています。この本は実に上手に編集された本で、つまり、フランス語圏、英語圏のその当時の1970年代の中盤までの生涯教育の論点を全部、いろんな人から、それを支持する人、生涯教育に対して反対する人、それから、それを総合化していく人というそういう三つの流れに分けて、創られた編著なんですね。日本語にしますと、『生涯教育あるいは生涯の疎外?』というのがタイトルなんです。それに、『神話の総括と政治的な総括』という副題をつけて1977年に出版されています。ちなみに、ここに私が翻訳したことがある、日本でも知られているエッソーレ・ジェルピという人の論考が一番最後の巻末の論文として掲げられています。つまり、エッソーレ・ジェルピの国際的な方向性というものが、生涯教育というもの到大変重要になってくるだろう、という意味を示唆していたのだと思います。彼の立場というのは、現状の生涯教育の実践や施策を単に肯定するのではなく、また全面的に否定するのでもなく、もう一段上から、彼のいう言葉では弁証法的に考えていこう、というものでした。そういうような3部作の最後の巻末の論文として掲げられているのです。

それから、生涯学習の革新についてですが、ちょうどその時代というのはイヴァン・イリイチという人の脱学校論という著書をご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、それ

が流行していた時代でした。ガストン・ピノーはメキシコにあるイリイチが主催するセミナーにも出席していましたが、必ずしも同じスタンスでやっていたわけではありません。ピノーには、イリイチに関する論文もあるんですけども、批判と共感を伴って、面白い論文を書いています。それらがピノーの最初の仕事でした。

2) 農業労働の経験 / 大学への復帰 / カナダ（モントリオール大学）へ

それ以前に実は、ガストン・ピノーは大学に行く前に、メモで言うと、高等学校卒業後20歳の時に、本人の言葉ではドロップアウトしまして、ヨーロッパの、おそらくスペインだと思うのですが、南部の葡萄刈りの農業労働者として働くことになります。この経験は後に‘Les combats aux frontières des organisations’『組織の境界への闘い』という組織論、この組織というのは大学組織なんですけど、に結実するわけです。そこで、さまざまな生涯教育の実践を労働の経験を通して知るようになります。

それから80年代に、彼は大学に戻ります。帰るというよりは、アカデミズムの世界に復帰するという形で、大学に入り直します。その当時有名だったのは、余暇社会学という分野で第一人者の、翻訳も日本にあるのですが、ジョッフル・デュマズディエというフランスでは生涯教育の先駆者と言われる人です。その人の下で、生涯教育論を社会学の観点から始めます。これは、‘Rôles et systèmes nouveaux en éducation, Approche systémique d'un service universitaire d'éducation permanente’「教育における新しい役割とシステム—生涯教育の大学サービスの体系的アプローチ」で、次の説明とも関係するんですけども、大学の論文を書き上げた時代から、モントリオール大学—カナダのフランス語圏の大学ですが—新しく創設された生涯教育学の部署、生涯教育学部の責任者のポストに就任します。それから10年程、ずっとカナダに腰をすえて生涯教育の研究をするわけです。その時に書かれたのが、1984年の‘Produire sa vie:autoformation et autobiographie’『人生の創造—自己教育と自伝』という著書、皆さんのお手元に紹介のあるガストン・ピノーとマリー＝ミッシェルの共著です。

3) ライフヒストリーと生涯教育 / パリ（ツール大学）へ

そのあと、フランスのツール大学に移って、ずっと定年まで教鞭を執り、研究を行いました。そのカナダからパリの間にライフヒストリーに関心を持ち、研究も、そちらにシフトしていきます。ASIHVIFなどの教育におけるライフヒストリーの国際学会を、いくつも立ち上げて、その成果物を、L'Harmattanというフランスでは有名な出版社がありますが、その出版社の下で、『ライフヒストリーと教育』というシリーズを公刊しています。このガストン・ピノーを紹介するチラシの表紙は、フランスのクセジュ文庫の本の表紙を採ってきたものです。この本だけではなくピノーの仕事は、生涯教育だけではなくて、様々な分野、心理学や精神分析、あるいは実践家からも高い評価を得ているのです。

以上がガストン・ピノーの作品と仕事ということなんですが、それだけでは何のことか十分に分からないと思いますので、今日お手元の2頁は、末本誠先生と翻訳を準備中の一番最初の序の部分を、どういうことが書かれているのか紹介している部分ですので、その紹介を兼ねて、

ピノーの紹介に代えたいと思います。

ご存知のように、ライフヒストリーというのは、研究者にとっても、あるいは実践家にとっても一番よく採用される手法です。しかし残念ながら、どういうふうに、その手法を作りあげるとよいのか、研究者の側もよくわからないし、教育とどういう関係があるのかということもわからない、というのが実際のところではないでしょうか。様々な面で実は、このライフヒストリーを研究の場で応用するというのは難しいことです。

4) 研究者自身が変容する関係

ガストン・ピノーは一言で言えば、文学や心理学、社会学や文化人類学、人間学などで、ライフヒストリーあるいは自伝や伝記といったものを総括したうえで、生涯教育でライフヒストリーを使っていこうそれは単なる研究ではなくて、あるいは教育でもない、研究者とそれを語る人とがダイナミックに交感していく研究の方法を新しく作りだしていこうとした人です。

そういう意味では、私たちの中には、何か普通の人の話をただ記述すれば、それがライフヒストリーだと思っている人がいるかも知れませんが、どうも居心地の悪い感じがする、というのも事実だと思うのです。また他方で、何か特別な人の話を記述することがライフヒストリーだと思っている人もいられるかも知れませんが、そういうものを一度括弧に入れて、方法として、理論としてライフヒストリーというものを教育の中に応用していこう、それが生涯教育だというのがピノーの示唆だと思います。それからもう一点は、これはとても大事なことだと思うのですが、普通、語れる人と語る人の関係は、語れるというか記述する人、書く人というのは、ライフヒストリーの実践の中では特権的な地位にあるということをあまり自覚していないですね。書くという行為が、とても特権的な場所からなされているということについての自覚がない、というのが私の意見なのですが、ガストン・ピノーは、実はその面で、研究者=語りを聴く者=記述する側という立場の固定化に対しても、ある意味で変容を迫っている一聴くことによって研究者も変わるというようなダイナミックな関係を構想しているんですね。これが今までのライフヒストリー論の、客観的に記述する科学としてのそれと違うところです。これも面白いところだと思います。それについてはピノー自身が語ってくれるでしょうから、ここで私がこれ以上言うのは控えさせていただきます。

実はガストン・ピノーが書いているものはとても難しい。というのは彼の著作の難解さは、勿論、哲学的な難解さを備えている点が第一の理由なのですが、それだけではなく、詩的な韻を含んだり、語呂合わせをしたりとか、そういうフランス語のもっている遊びを論文の中に入れ込んでいる点があるんですね。とても文学的なセンスのある人で、社会科学の中にもそういうものを入れていこうという面白さがあります。私などはとてもかなわないと思っているところです。そういう点に触れながら、『人生の創造』の序のところを紹介したいので、少し読ませていただきます。

5)『人生の創造 自己教育と自伝』への誘い

「教育者の語る人生についての講義など何ほどのこともない。」

これも難しい文章で、実はフランス語では「人生」(ライフコース)の「コース」というのが、「講義」(クール)と引っかけていますね。ですから「講義」と「人生」とが同じで、こういう掛詞になっているわけです。「多くの場合、人生という講義を本気で追いかけているのは、自分の人生だけである。」

書いたものなんてたいしたことではない、それを大学で話すなどナンセンスだ、と大学の先生が言っているわけですね。

「だが、人生は良くも悪くも、試練に満ちている。時には、これまで受けた教育は何だったのかと思わせるような忌々しさを伴うような辛い試練、困難な行く手・・・が待ち受けているのだ。」

自己教育というのが、ピノーの生涯教育の中でも最大のキーワードになるのです。

「自己教育が自らの講義を行うのはこの決定的契機においてである。苦労の果てに、あるいは知らず知らずのうちに、そして、ときには劇的に。人生とは愛であり、また死でもある。人生の危機を経験しない限り、いつまでも人は幼児のままであり続け、学校の生み出したものから逃れられないだろう。」

学校的な教育からどうしたら逃れられるのかということを、自己教育と題して語ろうとしているのですね。

「人生(という講義)のこの困難な自己教育こそ、本書で扱うテーマである。それがいかに困難なことか。なぜなら、自己教育に接近するためには、まず手はじめに、これまで学んだことを捨てねばならない。」

ここで'désapprendre'という言葉を使っています。unlearnという、最近流行している言葉があるのですが、ピノー氏はこの時点で既にそれと同じ意味の言葉を使っていて、翻訳していて驚きました。学んだことを捨てるという言い方はとても教育的、学習者の言葉です。それは、学んだことを忘れて、一回ゼロにして、もう一度再建していくということを伝えています。

今、ピノー氏が来てくれたので、話を早めます。その次の自己教育のところを見てください。このピノー氏の論の面白いところは、自己教育の中に時間の問題を入れたところです。本章の中では、一日、夜の時間と昼の時間と称して、自己教育は夜の時間だということを言っています。それから、自己教育に対するキーワードとしての他者教育(hétéroformation)、他律的教育というものを対比させて、自己教育を際立たせています。他者教育というのは何かというは、2ページの真ん中あたりにでてきますが、次のように定義されています。

「他者教育とは、学校教育、家庭教育、職業教育、社会－文化教育、基礎教育あるいは継続教育・・・などのように、主として他者から受けた教育全体を意味している。」

私たちはともすればhétéroformation、すなわち他者による教育だけを教育だと思ってしまう傾向がありますが、こういう対比の仕方、自己教育を組み入れることによって、教育というものが生涯にわたる過程であるということ、しかもそれが弁証法的な過程であることを教えてくれるだろう、と言っています。時間論もピノー氏独自の発想で、新しい議論を展開してい

るわけですが、ここでは余り時間がないので省略させていただきます。

2 ライフヒストリー論

3 ページをご覧ください。ライフヒストリー Histoire de Vieという言葉はどう訳すのか難しいところです。私は今のところライフヒストリーと訳していますが、ライフストーリーと訳す人もいます。これもまだ定訳というわけではありません。ここは、この点には触れないで、今日のお話の論点になるところですが、自己教育を人生の中で、どのように探求していくのかについて書かれているところを、ちょっと読ませていただきますと、

「自己教育を認識の対象として出現させるだけでは十分ではない。ライフコースそれは広がり複雑さと拡散性を持つものであるがーにおいて、具体的に自己教育を探求するためには、一つの手段、固有の方法を見出さねばならない。ライフヒストリーについての第2部はこの目的を追求する。」

ということで、マリー＝ミッシェルという人と本章は二部仕立てになっています。第三部でマリー＝ミッシェルが実際に話したことが書かれているのです。実はライフヒストリーにおけるピノーのユニークなところというのは、左にマリー＝ミッシェルという普通の家庭主婦が語った語りにおいて、右のページではその書かれたものについて、ガストン・ピノーが解釈するという構成になっているのです。それが特別に面白い。だから、見開きで、ライフヒストリーというのはどういうふうに分析するのか、普通日本のライフヒストリー研究というのは、語りの本人の語った中身が大事なので、研究者がどう解釈したのかというのはあまり見えない訳ですが、大体その解釈は陳腐なものに終わる、というのが私の穿った見方かもしれませんが、そういうことがあります。

ということで、この視点で、ライフヒストリー研究の中心は、四つぐらい展望するということになります。

一つは文学との関係です。伝記とか自伝というのは、日記も含めると、それは自分に対してのものですが、伝記や自伝というのは他者に対してアピールするもので、こういう文学の見解からライフヒストリーを抽出しています。

二つめは、心理学の歴史の中、あるいはセラピーなどで、自己分析、自己開発というのがありますが、ここからも養分というか着想を得ています。

三つめは、社会科学の中で、機能主義とか文化主義とかマルクス主義という様々な学派の潮流がそこにはあるのですが、著書の中でどうライフヒストリーが使われてきたかということを経緯しています。

四つめは、近年隆盛をみた民衆教育における意識化の方法の活用です。これはご存じの方もいらっしゃるように、パウロ・フレイレという、ブラジルの民衆に対して識字教育を行った実践であり、かつまた実践的な理論を、ライフヒストリーの方法論として精緻化しているというものです。

それから、次のマリー＝ミッシェルの語りというのは、第三部になりまして、これは普通のカナダの主婦が、子どものころから中年に至るまでの自分と人生を語っているわけです。その

分析、解釈、その語りを重層的に分析しているところが特徴です。ピノー自身もこのマリー＝ミッシェルとのライフヒストリーの協働作業を行う中で変容してっていますが、この関係のダイナミズムこそが本書の大きな魅力を作り出しています。

なかなか、私が一人でこういうふうに言っても、実際には何のことか皆さんの中ではわからないと思います。せっかくピノー氏に少し早いめに来ていただいたので、少し休憩の時間をはさんで、できるだけ多くの時間をピノー氏のお話にあてたいと思いますから、私の話は以上にいたします。ご静聴ありがとうございました。